



**海外作家賞**  
**ピーター・ドレスラー (Peter Dressler)** =オーストリア・ウィーン在住=  
 一連の作家活動に対して

1942 (昭和17) 年ルーマニア・ブラショフ生まれ。1966 (同41) -71 (同46) 年ウィーン美術アカデミー入学 (美術)。1980 (同55) -83 (同58) 年、「オーストリア写真の歴史」展を共同企画、カタログに寄稿。1989 (平成元) 年、オーストリア連邦から写真文化功労賞。2001 (同13) 年、ルペルティヌム近代美術館 (オーストリア・ザルツブルグ) 写真賞。



"Business Class" シリーズより 1996年



"Tie Break" シリーズより



"Tie Break" シリーズより

**国内作家賞 / オノデラユキ (おのでら・ゆき)** =フランス・パリ在住=  
 一連の作家活動に対して

1962 (昭和37) 年東京生まれ。桑沢デザイン研究所 (東京) 卒業後独学で写真を学び、1991 (平成3) 年第1回写真新世紀展で優秀賞授賞。'93 (同5) 年パリに活動拠点を移す。2001 (同13) 年、東川賞新人賞。2003 (同15) 年、写真集『カメラキメラ』 (水声社刊) で木村伊兵衛賞。2006 (同17) 年、フランスで最も権威ある写真賞とされるニエプス賞。2010 (同22) 年開催の個展「オノデラユキ 写真の迷宮へ」展 (東京都写真美術館) が評価され芸術選奨文部科学大臣賞。



真珠のつくり方, No23, 2000



Transvest-Judie, 2005



11番目の指, No.2, 2006

年審査委員だった岡部あおみ氏が退任、美術評論家・松濤美術館学芸員の光田由里氏が新たに加わりました。審査委員は次の通り (50音順、敬称略)。  
 浅葉克己 (アートディレクター) ▼ 笠原美智子 (写真評論家) ▼ 楠本亜紀 (批評家、キュレーター) ▼ 佐藤時啓 (写真家) ▼ 野町和嘉 (写真家) ▼ 平野啓一郎 (作家) ▼ 光田由里 (美術評論家) ▼ 山崎博 (写真家)

**海外作家賞**

**ピーター・ドレスラー氏**

1970年代からウィーンを舞台に積極的に作品を発表。文字やラベルを写した写真や、詩的イメージを喚起するキャプションによって、イメージとテクストの関係を重視した作品をつくる。90年代からは、自身が演じたビジュアル・ストーリーを収録した子供の本の装丁を真似たアーティストブックの制作を始める。ホテルの備品を盗んでスリケースに収めようとする場面を写した「Business Class」や、ガウンをまとい、エナメル皮の靴をはき、白手袋をはめた格好で屋内テニスをする「Tie Break」、動物の骨や調度品、絵画、ぬいぐるみといったものの個人コレクションを吟味する姿を写した「Lasting Values」などのシリーズがある。これらの作品は、アイロニーとユーモアの混じったやり方で、公共の空間や美的価値についての問いを投げ

かける。

**国内作家賞**

**オノデラユキ氏**

作品シリーズに、空をバックに立たせた古着の不思議な存在感を写した「古着のポートレート」、箱型カメラの中にビー玉を入れて街中の群集を撮った「真珠の作り方」、昆虫の擬態への興味を広げて新聞や雑誌の切り抜きをコラージュ撮影した「Transvest」、ローマという地名に導かれて訪れたスウェーデンとスペインにある土地をステレオカメラで片方づつ撮影し、手彩色をほどこした「Roma-Roma」などがある。一般的な写真の概念を軽やかに侵犯しつつ、写真の可能性をさまざまな形で追求した作品の発表を意欲的に続け、ヨーロッパ、日本、中国、韓国などで個展を開くなど世界的に活動を展開している。

**新人作家賞**

**北野 謙氏**

1989 (平成元) 年から'95 (同7) 年ころまで東京の街をスローシャッターでとらえた「溶遊する都市」シリーズを撮影し、2009 (同21) 年に写真集としてまとめる。'99 (同11) 年からさまざまな職業、地域、信仰など、ある集団に属する人々を現場に赴いて撮影し、そのポートレートに均等に多重露光した「Omiface」プロジェクトを開始する。日本に留まらずアジア各地で撮影を

続け、今後はアメリカ、ヨーロッパ、アフリカでも継続して撮影を行う予定。世界の人を「垂直と水平方向につなげる」という壮大なプロジェクトを展開している。2007 (同19) 年から、ある場所の一日を一枚のフィルムに焼き付ける「one day」シリーズの撮影を始めている。

**特別作家賞**

**奥田 實氏**

昨秋出版した大作「生命樹」(新樹社刊) に対する業績評価が受賞理由。一見すると樹木の図鑑のような装丁本で、解説の文字も多いため写真集のように見えない。しかしよく見ると、イラストレーションのように配置された図が丹念に切り取られ、四季の変化を構成して巧みにコラージュされた写真であることが分かる。

Kat Blossfeldtの自然の構築的形態を見出すような植物写真集を想起させ、コラージュの作品をていねいに見ていくと、木の生命について実に丹念に観察し研究された成果であることが了解できる。

長年に渡って旅を続け、森に住み森を観察し続ける氏の姿勢は、ソロの「森の生活」をイメージできる。そしてまさに植物図鑑のように対象に對峙し、淡々と撮影する姿勢は、特別賞にふさわしいものといえる。

**飛弾野数右衛門賞**

**百々 俊二氏**

百々俊二氏は、生まれ育った大阪を

中心に、関西拠点に長年写真に関わってきた。自身の記憶に基づいた風景をたどり、大阪の人と土地を8×10 (F) フィルムの大型カメラで丹念に撮影した白黒写真集「大阪」(青幻舎刊、262頁×262頁188ペ) を昨年出版した。

その写真は個人的な記憶に留まらずに、「大阪」という懐かしさを伴った共有のイメージを、大阪を知る者にも知らぬ者にも想起させる。

長年にわたって大阪の写真教育に携わってこられた姿勢も含めて、地域に根付いた活動を長年続けてこられた方に贈られる賞として最もふさわしいという結論となった。

1972 (昭和47) 年'77 (同52) 年まで同人誌「地平」を刊行。写真教育にたずさわりながら、一貫して関西を拠点に活動を続けている。'90年から撮影を始めた「栗十紀伊半島」、'96年から撮影を始めた「千年栗土」では、奈良、和歌山、三重を往還しながら、決して切り離すことのできない人間と風土の関係を写真に収めた。

2007 (平成19) 年、選歴後から始めた大阪の撮影では、自身の生い立ちの記憶をたどりながら、近代の歴史の痕跡とその「いま」を、猥雑(わいざつ)さと静謐(せいひつ)さが同居した作品の中にとどめた。

(各賞受賞者の講評は、東川賞審査委員会、佐藤時啓氏の講評から抜粋)